

目指す学校像

高き志【こころざし】

地域とともにある

勢いのある学校

No. 22 (R3. 10. 20発行) 文責 校長 福田雅也

ふるさとの宝を引き継ぐ

ホタル 回復の兆し

【熊本日日新聞 令和3年5月30日朝刊より】

御船町高木の高山地区の矢谷川一帯でゲンジボタルが舞い始め、川面を優しく照らしている。2016年4月の熊本地震、同6月の豪雨災害で激減していたが、住民らが生育環境を守る活動に取り組み、少しずつ回復の兆しが見え始めた。

「昔はイルミネーションみたいに何百匹も光っていたんですけどね。」近くに住む緒方章二さんがつぶやいた。子どもの頃は水遊びをして楽しんだ場所だが、地震で緩んだ地盤に豪雨が重なり「見たことない濁流」が襲った。翌年にはわずかに数匹しか確認できなかったという。

緒方さんは「高山ホタルの里造り実行委員会」を19年に立ち上げると、ホタルの保全に取り組む玉名市岱明町を住民有志と視察。翌年にはホタルがすみかにしやすい石を川に設置し、幼虫の餌になるカワニナを放流した。

住民によると、矢谷川は過去にも、近くを走る九州中央自動車道の建設工事や大規模造成の際に大量の土砂が流れ込み、ホタルが減ったことがあった。それでも姿を消したことはなかったホタル。「いま生息しているのは、いろんな逆境を乗り越えてきたホタルの子孫だと思う」と同地区の山下秀雄区長は思いを巡らす。

ホタルが多く出現する場所には小さな滝があり、すぐ脇には1057年創建と伝わる高山産神社がある。「子どもたちが地元の歴史やホタルについて知ったり、安全に学んだりしてほしい」と願い、実行委のメンバーは一帯の草刈りや清掃にも汗を流す。

今年は梅雨入りが早く、いきなり大雨に見舞われたが、数十匹のホタルが確認できた。「ホタルの光は聖火みたいなもの。次の世代につなぎたい。」と緒方さん。数百匹の乱舞が戻る日が楽しみだ。

これは、今年の5月に熊日日新聞に掲載された記事です。

高山地区のこの取組については、昨年度、学校へも連携の依頼があり、裏面にあるように、私と教頭が現地のホタルの様子を確認し、子どもたちの学習にどのように取り入れていくか模索を始めました。今年に入って、3年生の総合的な学習の年間計画に位置づけ学習に取り組むことにしました。その中で、採卵のためにホタルを捕まえ、幼虫まで学校で育てて、矢谷川に放流したいと考えたのです。幸いにも教頭が飯野小学校でホタル飼育の経験があり、この学習の推進役になってくれました。たった一匹捕まえたメスのホタルからたくさんの卵が生まれ、育ち始めた幼虫の数は300匹ほどにもものぼりました。子どもたちは、一部の幼虫を教室で育て、その様子を観察して学習を進めることができましたのです。10月初めには、300匹ほどの幼虫は順調に成長し1mmほどしかなかった体が1cmを超えるほどまでに大きくなりました。しかし、放流まであと10日ほどになっていた時、とてもショックなことが起こりました。幼虫が入った水槽から少し離れた所で殺虫剤を噴霧した次の日の朝、その水槽の中の幼虫が全滅していたのです。かろうじて、3年教室で育てていた一部の幼虫だけが無事でした。

昨日、子どもたちは生き残った50匹ほどの幼虫を矢谷川に放流しに行きました。高山地区の多くの方々が子どもたちを迎えていただき、一緒に活動することができました。前述の緒方さんや山下さんからは、後日矢谷川のホタルのことや、そのホタルとホタルが暮らせる高山の自然環境を残していきたいこと等のお話も伺う予定です。水質調査の学習も併せて行い、矢谷川の水質がきれいなこともよくわかりました。（学習の様子はHPでご覧ください）

3年生は、矢谷川にホタルを放流した後、次のような感想を書いていました。

（略）その後、わたしたちのクラスでそだてたホタルを川にかえしました。川にかえす時はさみしかったけど、「きれいな水のほうがいいよね」と思いながらかえしました。わたしは「ホタルが大きくそだってほしいな。」と思いました。

矢谷川のホタルのことを大切に、もっと知ってほしいです。

とても良い体験学習ができたことが伝わる感想です。

この体験を通して、「高山ホタルの里造り実行委員会」の方々の思いが伝わり、ふるさとの宝を引き継いでいこうという気持ちや、子どもたちの心の中に自然と生まれてきたのだらうと思います。